

PBL教育フォーラム 2014

「アクティブ・ラーニングにおける学習支援について考える

—学習支援者としての学生の役割と、その可能性—

アンケート結果

■第1部

1. 『取組報告』は、参考になりましたか？

<教員>

- 学習支援者自身の生の声や体験を聞いてよかった
- 特に京都造形大学リアルワークプロジェクトは、「アートと社会」「学びと仕事」などの接続が素晴らしい
- さまざまな学部学科の学士教育の場で、ファシリテーターとしての学生の役割探究がなされていることを知ることができた
- 大学によっては、学生の教育効果に疑問符が付く内容もあると感じた。イベント会社のバイト員(?)になってないかと思った。社会のニーズに答えているかもしれませんが、大学の学びになっていない気もした(同志社の学生が自分で述べていましたね)
- 私も学習支援活動に関わっているが、学習支援を行いたいという動機が先輩へのあこがれという点では共通しているのだと気付くことができた。ただ、私の組織では、学習支援を行いたいという動機ではなく、何となくの先輩へのあこがれから活動する学生が多いため、十分な学習支援を行っていない現状があることに気付くこともできた
- 事例紹介ではなくて、実践者が本質的な考え方を発表していたと思う。学生の発表が大変良い内容で、勉強になった
- 各大学の体制と効果がはっきりみえた
- 制度としての作り方と課題が参考になった
- 教員の側の工夫ももっと聞きたかった
- TAとしてのシステムがない中、学習支援者としての学生が存在する大学、TBLをやっている大学、「仕事」としてPBLを行っている大学など、いろいろな形の教育活動があり、それぞれの違いや共通点を広い視野から見ることができた
- アクティブ・ラーニングや、学習支援者としての学生の役割について、参加前はあまり知らなかったなので、ようやくイメージがつかめた。これから考えていくきっかけになった
- 学生の発表は工夫のあとが見られ、参考になった
- 日本の教育の変革に役立つPBL教育フォーラムだった
- TBLというのは初めて聞き、中学校の学習スタイルとして、大いに活かせるものであると思った。ITCを活用しながら、基礎的な知識や技能を伝授していくにあたって、もはや「座学」の効果が低いことは明らか。このTBLについてもっと知りたいと思った。また他大学の発表に共通して、SA、LA自身が成長していく様子がうかがえたことも、「早く教師が独占し続けているものを、手放すべき…」という思いを強くした。おそらく、PBL、ALの効果というものの本質的な部分だろう

<職員>

- 同志社大学の報告がていねいな報告で良かったと思った
- 看護各部のカリキュラム概要について（特に実習の重要性）を垣間見られた
- 学生さんたちの生き生きとしたプレゼンから、自身の成長を実感されていることを知れた
- PBL・TBL 授業を履修した学生だけでなく、その授業に TA・SA として携わった学生にも学びが得られるという点が、大変参考になった。TA・SA にも課題を持って取り組んで貰う必要性を感じた全ての TA・SA に同じレベルを求められるかが問題だと思った
- 本学では PBL・TBL は取り入れていないが、今後授業の一つの方法として、取り入れてもよいのではないかと感じた。SA 中心とした学生が主人公となったアクティブ・ラーニングに目がうるこになった。特に各 SA の発表がよかった
- 本学ではこれから PBL 科目を設置する予定であり、プロジェクト科目の運用方法について、とても学ぶことができた
- 取り組む職員が大切だと思う
- 学習支援の機能や方法について、各大学であまりに多様な展開がなされていることが参考になった
- 単なる授業補助でない SA-TA のご活躍に驚いた。と同時にそんなにつっこんでいいのか、大学もそこまで求めていいのかと疑問に思った。制度になっていないが、聖路加国際大学の事例が安心した
- 現在でも短大本科生と専攻科生との上下のつながりを活かした活動を展開しているが、その場限りのものが多いと感じる。各報告で見せていただいた役割や活動などを取り入れることにより良く機能していくと思った
- 専門（看護）教育や、実社会を常に意識した姿勢の京都造形芸術大学、グループワークへの参加、プロジェクト科目への参加と、多種多様な環境下での報告が聞けて、それぞれに参考にすべき点があり、とても有意義だった
- 聖路加国際大学／京都造形芸術大学の教員のプレゼンはよかった。

<大学院生・学生>

- PBL、TBL、TA、SA など制度は異なるものの、京都造形芸術大学と同志社大学の PJ、聖路加国際大学と関西大の取り組みはそれぞれ似ていると感じ、その中での差異や取り入れるべき点が見え、相互に向上できると確信している

<企業関係者>

- 「仕事」としている大学、「マニュアル」を作らない大学
- 聖路加国際大学の報告であった専修の科目での取組が新鮮だった。TBL も面白い題材だと感じた

<その他>

- 各大学の授業への取り組み方、発表者の理解が分かるような学生の発表方法 AL の理解の仕方など分かるような発表だった。特に京造芸大の学生は場の安全と信頼とタイムマネジメントに言及されたことが良かった

2. 内容等についての、ご意見やご感想

<教員>

- 上手くいった例だけでなく、失敗例、苦勞している点、成立するまでのプロセスで難しかった点なども聞きたい。職員さんの役割、具体的な業務や運営上の工夫なども聞きたい
- プロジェクト的な要素のものが多く、大学での学術的な学びの中での学習支援者の役割について聴いてみたかった
- TAは、teaching assistantつまりは、teacherのassistant。実際にはTBLやProject(team)をサポート、assistするmissionをおびてきているので、Team(work) Assistantと呼んだほうがよいのではないだろうか
- 参加型の授業については、ある程度実践してきているが、教員—学生以外に、SA・TAという存在は知らなかった。SA・TAになりたい！と言う人が自発的に出てくるのか？疑問だった。「予習課題」—大変だと思うが、学生たちが取り組むケース、あまり熱心に取り組まないケースが出てくる、モチベーションを上げるにはどうしたらよいのか？
- 関西大学の取り組みや授業内容の説明を知りたかった。
- 2010の東大教育学研究科の入試の偶然にも2つのコースで、日経の社説「イギリスの教育省の視察監が来て、『日本はまだchalk&talkの授業をやっているのですか』」このchalk&talkにPBLは風穴をあける可能性があるかもしれない
- 京都造形芸術大学の発表では、具体的でおもしろそうな活動もあった

<職員>

- 学生の活動範囲について詳細を知りたい

<大学院生・学生>

- 内容についてはどの大学も面白かった。関西大学の山本さんのプレゼンがとても上手だと思った

<企業関係者>

- 関西大学の三浦先生の話された“学問”の解釈が興味深く感じた

■第2部

1. パネルディスカッション「アクティブ・ラーニングにおける学習支援について考える—学習支援者としての学生の役割と、その可能性—」は、参考になりましたか？

<教員>

- 学習支援者を務めた学生が体験したことに基づいて、学習支援者の役割、可能性について具体的に報告され、何が問題であったかということについて話してもらった
- 学生の生の熱意
- 4人の学生が、自ら学習支援の体験を深く省察する場を実現していたと思う
- Active Learningというよりも「学び」をどう進めていくかの全体的なディスカッションがよかった
- SA/TAの具体的な学習支援が分かったこと。学生の視点からの苦勞がよりリアルに理解できた

- 用意されていない学生さんの言葉を聞くことができた。いわゆる「ノウハウ」にあたるような部分の話聞くことができた
- こうした学生を育成する仕組みを作った先生方に感服した
- 学生の取り組みの差に対して、SAも悩んでいることがよくわかった
- 学生のもてる力を活用することで、支援された学生も、支援する学生も、そして教員も成長することがわかった。
- TAの成長が分かった。コミュニケーション能力の育成が明確に分かった
- 次にやるべきことが明確になった
- パネラーが適切に（体験を踏まえて）応えているのがとてもよかった
- 普段、TA・SAを配置する側としては、彼ら自身がその役割についてどう考えているのか知り、自分の仕事との関連を見出すことができた
- LAの視点からの考えは初めて聞く機会、大変参考になった
- どのような学生を育成すべきか、その見本となるメンバーが登壇して下さり、満足している
- 教員が「評価」するのは、学期の終りなど、学生・生徒たちの評価すべき「瞬間」からかなり時間が経過していることが多い。SA・(TA・LA)が側にいることで、そうした瞬間のズレがなく、あたかも「地産地消」であるかのように、「行為」と「評価」が繋がっているのだと思う。それは学生や生徒たちにとって「自己満足感」を育むことに繋がっているのだと思う

<職員>

- 学習支援者とは、字の通り学習支援を行うということだが、ピアヘルパーとしての役割も重要で、下級生の信頼を得ることが大切だと学べた。ただ「寄り添う」「手をさしのべる」など、同じ学生をすでに見下している感を感じた。それもまた問題点だと発見ができてよかった。同じ学生が評価する人間になってよいのか？
- 学習支援者としての学生さん達のお話は大変参考になった。本学ではまだSA制度が確立していないので、制度を構築するための参考にさせていただきたい
- 多角的に成長をしていると思うので、参考になった
- それぞれ特徴のある取り組みを行っている学生同士に多くの共通点が浮かび上がってきて、それがライブで聞いたことで、自分が話し合いの場に直接関わっているような臨場感があって引き込まれた
- 実際に学習支援者として活躍されている学生さんの生の声を聞かせていただけ、教職員だけでは気付かない視点もあり参考になった
- アクティブ・ラーニングの最前線に関わる4大学の学生の生の声を聞いて、有意義なものだった。各大学において、TA/SA/LAを立てていることが非常に高い教育効果を生んでいると感じた
- 「寄り添う」「寄り添える」事に違和感を持つ学生も多い。そこを自覚したTA・LAがどう乗り越えるかまで議論の展開を待ちたい

<大学院生・学生>

- 学習支援者が評価者としての役割を担っているということに、改めて気づくことができたから
- 4大学の学生さんたちは学科学部バラバラであるのに、アクティブ・ラーニングに関し抱えている問題には共通項があり、私自身も「あ～、あるある、その悩み！！」と共感しながら聞けた

<企業関係者>

- コミュニケーション能力に終始していた。家庭や地域や小中学校でコミュニケーションを行っていない現われかな
- 学生に主体性を持った学びをさせる為には周囲の協力が不可欠で、媒体となる TA (SA) が果たす役割が非常に重要だと感じた

<その他>

- 受け止め方が理解できた。学生はその時の学生と TA とのかかわり方に重点を置いていたのに対し、先生は学生の変容に重点を置いていたことが理解できた

2. 内容等についての、ご意見やご感想

<教員>

- 学生と学習支援者との関係の問題点の指摘が多かったが、社会人の講師（教員）と学習支援者との関係で問題となることもあると思うが、今後とりあげてもらえればと思った
- プロジェクトのテーマ、内容に興味関心があってももしろい、楽しいと感じることができたら、うまくいくのだろうか???学生の温度差をどのように考えて、どのようにそれぞれに働きかけていけばよいか?個人ではなく、「チームとして」というのが、まだよくわからないことが多かった。「やらされている感」を感じている学生に対して、「主体的に楽しく」に転換するには?
- 学生らしい意見を率直に発してくれていたのがとても好感がもてたし、興味深かった。「学習支援者」が「よりそう」というのは、どういう意味かと最後に問われた妙が素晴らしかった

<職員>

- 日本人学生中心とした内容だったので、グローバルな環境（外国人留学生を含めてのアクティブ・ラーニング）での内容があればもっとよかった
- TA・SA 自身の成長の部分はよくわかったが、お世話をしている下級生への効果のあらわれの部分について、もう少し聞ければよかった
- 各大学の学生さんたちが、自分たちの役割を理解し、自分たちなら何ができるのか考えて行動している姿に感心した。また、同時にその「考える」というプロセスの中で、SA/TA を通して成長しているのだと感じた

<大学院生・学生>

- ふつうの授業（知識伝授型の座学）の TA になった場合、「授業通信」を作ってコミュニケーションペーパーの意見を受講生にフィードバックしたり、質問に解答したり、コラムを書いたりして、他の学生の考えにふれられるようにする
- パネリストの学生 4 名はそれぞれに経験豊富で考える力があり、ほっとしたら 4 名だけで話しこみ出しそうな雰囲気、これがアクティブ・ラーニングの成果かとも思った

■その他、ご意見やご感想

<教員>

- プロジェクト科目を受けている学生（積極的な学生）が板書を写メしているのに、少しショックを受けています。禁止することではないし、時代の流れかなあと思っているのですが……そんな学生に対する TA・SA の人たちの思いを聞いてみたかった…
- 学生さん達が素晴らしかった。教員の立場からではなく、支援者の立場からの悩みや経験談は面白かった
- それぞれの大学において、TA や SA がどのような身分で任用されているのか、そういった手続き的な点について知りたかった。例えば、おそらく多くの国立大学では TA や SA は「職員」である。よって学生のピアサポートとか言っても、それは正解ではない。マニアックなネタですいません
- 具体的な Work 体験をとり入れるのはいかがでしょうか。Active Learning、PBL を Theme としながら、Audience は長時間座して前方をみるだけ (Non Active)
- 自分の問いかけが他のメンバーのためにもなると、質問しやすくなったというのがなるほどと思った。「わからないことがわからない」状態の学生から、どのように引き出すか？議論する場（環境）がない、信頼関係ができていないので、そういう場をつくっていくことの大切さと難しさを感じた
- PBL 教育を語るとき「楽しんでいるか…」ということがしばしば出てくる。学習することを「楽しむ」という視点が、いよいよ注目されているのだとあらためて思った。中学校教育においても、まだまだ「勉強＝嫌なこと」と思われており、嫌なこと、面倒くさいこと…というように授業を認識されている限り、子ども達の積極的な学びは生まれない。そうした現状への「切り込み」として PBL 教育は期待されていると思う

<職員>

- PBL 科目の実際の授業を見学させていただけたらと思う。教員、学習支援者、受講生の実際の関係性や空気感を感じてみたいと思った
- 発表された学生の皆さんが本当にしっかりされており、感心した。まさに「学修の成果」を体得されているのではないかと思った。教員と SA/TA を担う学生さん双方からの話が聞けたことは大変参考になった。本学の学生にも発表者のみなさんのような体験・成長を促したいと思った

<学生>

- 今後は、参加者どうしの意見交換できる場所が絶対的に必要と感じる。なぜなら参加者たちの意見は各々違うからだ。年上、年下の方と話せる場を提供できれば、もっとこのイベントは良くなる。参加者は 150 名ほどだったが、この 150 名がこのイベントで感じたことを拡散すれば、日本の教育はまちがいなくよくなる
- 京都造形芸術大学で言う TA ミーティング、同志社大学で言う協議会を大学の垣根をこえて開催できると面白いと思う